

館長ならびに絃武館の皆様、そろそろ体から35周年記念のアルコールが抜けた頃と思いますいかがお過ごしでしょうか。

簡単ですが4月1日から5日のパリでの稽古ならびに昇段審査についてご報告いたします。

.....

35周年記念行事を終え、日本からハンガリーに戻り、久々の授業。週末一息ついてから電車でルーマニア・クルージュ市へ移動。妻に日本からのお土産を渡し、飛行機でクルージュからブカレスト-パリへと飛ぶ。

稽古会前日の夕方レニエさんの道場に到着し、翌日からの稽古に備えてゆっくり休もうと思っていたが、若いお弟子さん達が夜の通常稽古に見えて、せっかくなので着替えて制定形を稽古し、レニエさんに細かい注意をしていただく。

翌朝フランスを中心とした絃武杖道会の面々が到着し、レニエさんがおごそかに開会宣言。曰く「今回の稽古会のテーマは－自分の今年のテーマでもありますが－日本語で言うと『勝ちっぱなし』です。」なるほど。丁度日本で「稽古はいいが気概がない」と言われてきたばかりなのでこれは自分にも丁度良いテーマだと思い気を引き締める。さあかかろうと杖を取ったが、打太刀に指名されひたすら表の太刀の稽古をする。時折レニエさんブレスさんの指導や説明が入り、コリーヌさんや私に意見を求めたりもする。午後も同じような具合でひたすら表の打太刀。さすがに何人も相手にすると今まで上手く切れなかったところを工夫する余裕が出てくる。切れるところは嫌みにならない程度に切ってみる。中には上手く切ったと思った瞬間きれいに杖の技にかかっていることもあり、きちんとした太刀があってこそ杖の正しい技の稽古になり得るということを改めて認識し反省。見てないようで見ているレニエさんやブレスさんが時折自分にアドバイスをくれる。ふと気がつけば高段者組は隣で互いに中段以降の稽古。ほとんど杖を振れなかったので若干うらやましかった。次の日は前年にレニエさんがお弟子さん達に出した宿題「表の大切なポイント」についてそれぞれが書いてきたものに基づいて代表一組が形をやってみせ、おかしい点はその場で直す。ただしフランス語がわからないので今ひとつ流れについていけなかった。その後は再び打太刀を引き受け表・中段の稽古。午後も、各種武術やなにやら稽古している高段者を横目にひたすら表・中段の太刀を持つ。最後の方でやっと杖にありつき、影・乱合をコリーヌさんらと稽古する。結局打太刀中心の2日間で杖があまり振れなかったのが残念だったが、後に「そのうち高段者だけの稽古会をやろうと思う」というレニエさんの言葉を聞いて納得。

翌日は午後から市内の体育館で一般向けの制定型の講習会。午前中は5段審査のパートナーと試験に向けて稽古する。午後雨に濡れながら体育館に移動。ひどい湿気の中、みっちり基本で身体をならしてから段ごとに別れて稽古。そもそも日本人は目立つので、期待に応えるべく相手を圧倒するつもりで色んな人と稽古してみるが体力配分を間違えスタミナが切れかかる。また床が見事に滑らずブレーキがかかるので足運びに苦労した。休憩時間レニエさんに呼ばれ、講習会の終わりに演武するからやってくれと急に指名され、ブレ

ズさんと組んで唯一しばらくきちんと稽古していない水鷗流剣法と十手の打太刀を5本ずつすることに。水鷗流剣法を稽古しなかったことを後悔しつつも5本選んで引き受ける。休憩後再び段ごとに別れ稽古してからいよいよ演武。長刀、鎖鎌、杖色々あり、ついに自分の出番。「次の水鷗流剣法はとてもダイナミックで速い形です。」というレニエさんの説明を聞きながら（自分はそんなに速く教わった覚えはないぞ?!）と思いつつブレズさんと太刀先を合わせるが後の祭り。紹介通り速くしたつもりだったがブレズさんの太刀は更に速く、打太刀にすっかり押されてダイナミックどころではなくなってしまった。このままではみっともないので十手の太刀で巻き返そうと、先輩相手に遠慮せず居合刀を存分に振り飛ばし散る金属片。この日が一番疲れた。

次の日から2日間の「パリ杖道祭」。午前中は段ごとに別れて講習会。翌日の昇段審査に向けパートナーと組んで稽古する。午後は大会。ペアで審査される日本と違って完全な個人戦および3人グループの団体戦があり、次にどの形をやるのか頭がこんがらがりそうになるが面白かった。トータルで二回負けてしまったが表彰台には上がることができた。最終日はほとんど審査のための最終稽古といった感じだった。四年前の四段審査の時はかなり緊張してあまり満足にできなかったのだが、今回は前よりリラックスして臨めた。そうは言っても多少堅かったようで、合格はしたもののレニエさんに「五段なんだからみんなもう少し柔らかく・・・」と言われてしまった。

四年前パリに来たときはだいぶ子供扱いされたので今回は成長した姿を見せようと思っていたのだが誤算で、皆も同じだけ年を取っていたため、今回も稽古場を除いては皆の自分に対する対応は同じであった。まあこれが当たり前のヨーロッパの人間関係なのだが、しかしながら合格後「ブチ五段」と親しみを込めて呼ばれたのには苦笑する他なく、生まれつきの童顔はしょうがないにせよ、今後「気概」を含め、位のある杖や太刀を使えるよう稽古していきたいと思う。しかしそれらも技が使えてこそ。日本で稽古できれば一番いいのだがお金の問題もあるので、とりあえずは時間を見つけて時々フランスで稽古をつけてもらえるようにしたい。

毎度ながらレニエさん、フランスの皆さん大変お世話になりました。

2010年4月

角 悠介